

関係性のなかに 介在するもの

本田直美

ほんだ なおみ / AA 研研究機関研究員

自分の内側にあるものを
表現するというよりも、
自分と他者との間の
関係性のなかから生まれる何かを
つかみたいと思っている。

身体の延長にある衣服

私はAA研の広報を担当しており、芸術大学出身という、他のAA研の皆さんとは少し異なったバックグラウンドを持っている。今も自分の制作する際の考えの基礎となっているきっかけが大学の卒業制作にあったと思うので、今回は卒業制作の過程を少しお話しさせていただきたいと思う。

大学ではファッションデザインを専攻として制作していた。ファッションデザインというと、服のブランドや日常的に着る服などを思い浮かべるかもしれないが、私は大学に在学している頃から、ブランドの服よりも民族衣装や舞台衣装に心が惹かれることが多かった。それは恐らく日常から離れた非現実的な世界を楽しむ感覚と、特に民族衣装には一人の人間が考えただけではない、連続と続いてきた太古の智恵のようなものを感じるからである。

自分にとって衣服とはただ外側から異物を重ねるものというだけでなく、自分の身体の延長という感覚や、皮膚を拡大しているようなイメージがあると思う。

思いもよらなかった小さき生き物との邂逅

4回生になった時に私は陶芸の先生が担当しているゼミに入ることにした。それまでほとんど布ばかりを扱っていたが、違う素材に触れて新しい発見をしてみたいとなったのである。そこで私は思いもよらず卒業制作に繋がるカビとの出会いを経験した。

ガラスの素材を使った授業で私は「ご飯を残さないための茶碗」という作品を作った。ご飯茶碗の中にご飯粒があるようなディティールを作り、ご飯粒が残っているところを容易に想像できるようにすることによって盛りすぎを防ぐ、というコ

ンセプトの茶碗だ。お米に感謝しながら、茶碗にご飯粒を一粒ずつ丁寧にピンセットで貼り付けていき、石膏で型をとり、型にガラスの破片を敷き詰めて窯で熱して石膏の型の通りに溶かすという工程だった。ご飯粒を使って石膏の型を取ったおかげで、一週間後に開けるとそこにはナウシカのような腐海の森が広がっていた。思いもよらないカビの増殖に私はあまりにも衝撃を受け、同時に、人間以外の生物が、生存するための過程で人の目に見える形で模様を作っていることが面白いと思った。

共同作業でできあがった作品

それから身近にあったカビに興味を持ち始め、どれくらいカビを増やすことができるのか実験を始めた。シャーレの中ででん粉と糖分を含めた寒天を培地にして、すでに生えたカビを載せてみたり、大学の建物が面している山に行き、でん粉と糖分を溶かした水分を布に吹きかけて袋に入れたものを土に埋めてみたりなどの実験を行った。カビが増えるための材料さえあれば布の上でも増殖させることが可能ということがわかったところで、どう作品に落とし込むか悩んでいると、ゼミ生みんなに前掛けを着せてお好み焼きを食べてもらい、その際に前掛けに飛んだ食べこぼしを利用してカビを生やすのはどうか、と先生からアドバイスをいただいた。意図的に自分でカビの培地を作るよりも、自然の動作の中で生まれた模様の方が面白いカビにとっても良いだろうと思った。(ゼミ生みんなに前掛けを汚してもらうためいつも以上に大胆に食べてもらうようお願いすることにはなったが) お好み焼きを食べた後の前掛けを学校の裏山に干してカビの胞子を十分に付着させ、霧吹きで湿らせた後、袋に入れて段ボール



米粒をコツコツと茶碗に載せていく。



*写真はすべて筆者撮影。

学校の裏山で実験中。



ゼミ生みんなが食べこぼした前掛けを裏山に干しに行き、カビの胞子を付着させる。



様々な食材を使って教室の壁で実験。左から白米、紫芋のホイップ、ケチャップ、味噌、白米とジュースを混ぜたもの（紫や赤などの派手な色は食材の着色によるもの）。

の中で保管した。食べこぼしでは実験したことがなかったため上手くカビが生えるのかははらと待っていたが、私の心配をよそにカビたちは元気にむくむくと成長し、見事に前掛けに模様をどんどん描いていった。これが私の卒業制作となった。

原点にあるもの

普段は敬遠されがちなカビを扱うことによって、奇を衒った作品を作りたかったわけではない。自分が意識していないところで違う生物の営みがあり、それがある時にふっと目視できる形で突然現

れたことが自分の中で印象に残り、作品として落とし込めないか考えたのが始まりだった。もちろんカビの胞子は人体にとって過剰に摂取すると害になることがあるし、変化し続ける作品としては面白い面もあるが永続的に保存するのは難しい。自分が作品を作っているようで実際には様々な要

因が絡み、一つのことが出来上がっているということは何か形として表現したかったのだと思う。

少し話は変わるが、アジアの形をめぐるエッセイや論文を集めた『アジアの形を読む』という文化誌の序文で、すでに鬼籍に入られた数学者の森毅先生が「人と人とのネットワークの中をただよっているのが自分であって、それ以外にはもともと隙間があり、それを埋めるためにしかたなしに言葉のカビを生やしていると。勝手ながら、自分が感じていたことを代弁していただいたような気持ちになってしまった。自分がどうしてカビを作品に用いたのか、うまく言葉にまとめることができなかったが、森先生のこの何気ない話にとでも救われた思いだった。原点を忘れそうになった時、いつもこの文章を読んで帰っていくようにしている。

FP

石膏を開けると腐海の森が広がる！

